北陸中日新聞

2019年（平成31年）1月26日（土曜日）

訪日のカンボジア学生
「日本の勉強法知りたい」
公立小松大

カンボジア人学生の訪日団が二十五日、小松市土居原町の公立小松大中央キャンパスを訪れた。日本人とカンボジア人の学生が、お互いの国を紹介し合い、交流を深めた。

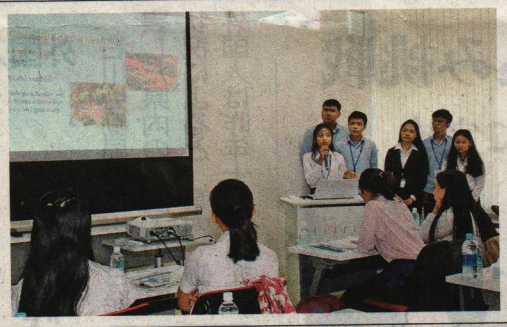
訪日団は、カンボジア各地の大学から集まった二十一人。外務省の対日理解促進交流プログラム「JENESYS（ジェネシス）2018」に参加し、二十二日に来日した。同大の塚脇真二特任教授がアンコール世界遺産国際管理運営委員会の特別専門家委員を務めている縁もあり、県を訪れた。

カンボジア人学生は、国内の健康問題、公用語のクメール語の歴史、環境問題について英語で発表した。クメール語を紹介した学生は、英語など外国語の普及で、間違った文法やスペルのクメール語が増えたと指摘。「クメール語を守る方法を真剣に考える必要がある」と話していた。

日本人学生は、同市の歌舞伎や九谷焼などの伝統文化を紹介し、昨夏にあったカンボジアの「アンコール遺跡整備公団」での就業体験の成果を発表した。

訪日団は二十八日まで県内に滞在し、二十九日に帰国する。ソウ・ソチァターさん(二〇)は「日本の学生の勉強法や生活を知りたい」と期待を寄せた。

（長屋文太）



健康問題について発表するカンボジア人学生ら＝小松市の公立小松大中央キャンパスで